慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ベルクソン哲学における自我の構造：「社会的自我」の役割
Sub Title	La structure du moi dans le bergsonisme : le role du moi social
Author	小出, 泰士(Koide, Yasushi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1997
Jtitle	哲學 No.102 (1997. 12) ,p.99- 124
JaLC DOI	
Abstract	Dans Les deux sources de la morale et de la religion, Bergson a distingue le moi individuel du moi social. Mais il a decrit a peine comment ces deux mois se forment et composent un seul moi. L'intention de ce discours consiste a eclairer le rapport entre ces deux mois et la fonction du moi social a l'interieur du moi, en se referant aux deux mois (moi profond et moi superficiel) dans Essai sur les donnees immediates de la conscience. D'apres Les deux sources, j'estime que le moi individuel et le moi social correspondent respectivement au moi profond et au moi superficiel. Dans Essai le moi est connu comme un moi profond durant et reel dans le cas ou nous le connaissons directement, et comme un moi superficiel, symbole du moi profond dans le cas ou nous le connaissons indirectement par l'intermediaire de l'intellect. Ce moi superficiel nous permet de communiquer avec les autres. Toutefois le moi reflete en realite dans la conscience est constitue et du moi profond et du moi superficiel respectivement a des degres variables. Probablement en est-il de meme fondamentalement du moi individuel et du moi social dans Les deux sources. Mais, de plus, dans Les deux sources, Bergson a ajoute au moi social la fonction a la fois de controler le moi individuel et de supporter l'individu dans le moi meme, et de contribuer a organiser et a conserver l'ordre public en observant les disciplines dans la societe close.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000102-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ベルクソン哲学における自我の構造**

——「社会的自我」の役割——

小　出　泰　士*

La structure du moi dans le bergsonisme

——Le rôle du 〈moi social〉——

Yasushi Koide

Dans《Les deux sources de la morale et de la religion》, Bergson a distingué le 〈moi individuel〉 du 〈moi social〉. Mais il a décrit à peine comment ces deux mois se forment et composent un seul moi. L'intention de ce discours consiste à éclairer le rapport entre ces deux mois et la fonction du 〈moi social〉 à l'interieur du moi, en se référant aux deux mois (〈moi profond〉 et 〈moi superficiel〉) dans《Essai sur les données immédiates de la conscience》.

D'après《Les deux sources》, j'estime que le 〈moi individuel〉 et le 〈moi social〉 correspondent respectivement au 〈moi profond〉 et au 〈moi superficiel〉. Dans《Essai》le moi est connu comme un 〈moi profond〉 durant et réel dans le cas où nous le connaissons directement, et comme un 〈moi superficiel〉, symbole du 〈moi profond〉 dans le cas où nous le connaissons indirectement par l'intermédiaire de l'intellect. Ce 〈moi superficiel〉 nous permet de communiquer avec les autres. Toutefois le moi refleté en réalité dans la conscience est constitué et du 〈moi profond〉 et du 〈moi superficiel〉 respectivement à des degrès variables. Probablement en est-il de même fondamentalement du 〈moi individuel〉 et du 〈moi social〉 dans《Les deux sources》.

Mais, de plus, dans《Les deux sources》, Bergson a ajouté au 〈moi social〉 la fonction à la fois de contrôler le 〈moi individuel〉 et de supporter l'individu dans le moi même, et de contribuer à organiser et à conserver l'ordre public en observant les disciplines dans la 〈société close〉.

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程（倫理学）

** 池上明哉委員より提出 (Communicated by Prof. Haruya Ikegami)

はじめに

『道徳と宗教の二源泉』(以下,『二源泉』と表記)の中で,ベルクソンは「社会的連帯性が存在するのは,我々各人のうちで,社会的自我 (moi social) が個人的自我 (moi individuel) に付加される時でしかない.」[*1] と述べている.このように,『二源泉』においてベルクソンは自我に二つの自我「個人的自我」と「社会的自我」を区別しているが,二つの自我がどのようにして個人のうちに形成され,どのようにして一つの自我を構成しているのか,という点にはほとんど触れられていない.道徳を論じる際にこれほど重要な用語が,しかもベルクソンの著作にこの時初めて使用されたにもかかわらず,十分な説明がなされていないのは,常に周到なベルクソンを思えば,奇異な印象すら受ける.

ベルクソンがなぜ『二源泉』において二つの自我のあり方についての説明を省いたのか,また,実際に自我の構造をどのように考えていたのか,という疑問に解決を求めるべく,もう一度,ベルクソンの自我論ともいうべき最初の著書『意識に直接与えられているものについての試論』(以下,『直接与件』と表記)に立ち返り,ベルクソンが自我というものをどのようにとらえていたかということを確認したい.そこから改めて「社会的自我」と「個人的自我」からなる自我のあり方を理解することによって,ベルクソンの考える個人と社会との関係,そこにおける「社会的自我」の役割を明らかにしたい.

1. 質的多数性としてある自我

ベルクソンは,29歳の時に博士論文として提出した『直接与件』の中で,自我に二つの自我,「深層の自我」(moi profond) と「表層の自我」(moi superficiel) を区別している.[*2] そして,「表層の自我」が「深層の自我」を覆う,という自我の一般的なあり方について語っている.[*3] だがそ

のように自我に二つの区別を設けたすぐ後で，「人格を二つに分け，我々がはじめに排除しておいた数的多数性を，別の形でそこに導き入れている，と我々を非難しないでいただきたい．……同じ自我なのである．」[*4] と付言している．ということは，確かにそこで，あたかも自我に「深層」と「表層」という二つの部分があるかのように語りはしたものの，ベルクソン自身は一貫して，自我は常に一つの全体をなしており，部分に分けられるものでは決してないことを前提して語っている，ということではなかろうか．

この二つの自我「深層の自我」と「表層の自我」がどのように関係しあっているのかという点については，次の第二節で詳細に検討することにして，今はさしあたり，自我の実相をベルクソンはどのようにとらえていたか，という点を確認したい．

『直接与件』の中でベルクソンは，自我のあり方を「質的多数性」(multiplicité qualitative) と規定している．これは，「数的多数性」(multiplicité numérique) に対立する概念である．[*5]「数的多数性」とは，その中に含まれる諸要素が判然と見分けられ，区別され，その諸要素を数えることのできる多数性である．それに対して「質的多数性」とは，諸要素が相互に浸透しあっていて判然と区別されずに一なる全体をなしているような多数性である．この全体は確かに単純なものではなく，多様な要素を含んではいるのだが，敢えて言えば，それらの要素を「潜勢態で」(en puissance)[*6] しか含んでいないので数えることはできない．そもそも，ものを数えるためには，その諸要素を区別して並置しなくてはならない．したがって，ベルクソンにとって「数的多数性」とは，空間的なものの性質である．それに対して，「質的多数性」は「数や空間とは無関係」[*7] であり，時の経過とともに「徐々に豊かになってゆく」[*8] 意識の性質にほかならない．このような意識のあり方こそ，ベルクソンが「持続」と呼んで，『直接与件』において最も提示したかった実在 (réalité) の一つのあり方なの

である.「質的多数性」としてある自我の特徴を，要約して以下に示す.（要約筆者）

(1) 時間の流れとともに，自我は絶えず新たな現在の印象を受け取り，受け取ったものを過去の全体と有機化して新たな全体を形作る．したがって，その全体は絶えず質的に変化していく.[*9]

(2) 意識に含まれる諸状態は相互に浸透しあって自我の一なる全体を形作っている.[*10]

(3) 意識に含まれる諸状態のうちには，自我全体の色合いが反映している.[*11]

(4) 意識に含まれる諸状態を区別したり名指したりすれば，その状態は変質してしまう.[*12]

このように，本来の自我は，時の経過とともに絶えず質的に変化してゆく．したがって，意識の諸瞬間は，絶対に異質なものとして絶えず差異化してゆく，と一応は言うことができる．ただ，意識は連続しているので，実際には「異質的諸瞬間は相互に浸透しあってい」て，意識のある瞬間を他の瞬間から区別することはできない.[*13]

また，各個人における意識の諸瞬間が異質なものであるばかりでなく，異なる個人の間においても，本来の意識状態は絶対に異質なものであり，共約不可能である．なぜなら，本来の自我においては，知覚，感覚，感情，観念といったありとあらゆる諸要素が相互浸透して一なる全体をなしているために，「意識の諸状態のどれ一つをとってみても，それは他のあらゆる意識状態の色合いに染められている」からである.「こうして，我々は誰しも自分なりの愛し方，憎み方を持つのであって，この愛，この憎悪は我々の人格全体を反映している.」[*14] したがって，個人のいかなる意識状態も，他者がそれを完全に理解することはできないことになる.

以上のことから，時間とともに生成しつつある独自な自我,「質的多数性」としてある自我については，自我全体もその諸要素も，決して空間的

に区別したり並置したりしてとらえてはなるまい．つまり，ベルクソンの言葉を文字通りに受け取って，自我に「深層」と「表層」，あるいは「社会的」と「個人的」などという二つの部分が共存しているかのように，空間的に図式化して理解してはならないことになる．

2. 二つの自我の関係

自我が「深層の自我」と「表層の自我」といった二つの部分からなるものでは決してなく，内容は多様でありながらも常に全体として一なるものであるとすれば，『直接与件』においてベルクソンの区別した二つの自我は，実際にはどのようにして一つの自我を形作っているのだろうか？

最初の著書のタイトルにも含まれている「直接的」(immédiat) という言葉は，ベルクソン哲学にとって，非常に重大な意味を荷っている．[*15] 「直接的」とは，文字通り，「媒介なしに」という意味である．我々が対象を認識する際，対象が我々の外部にある場合には，その対象のとらえかたは一般に間接的であるように思われる．というのは，カントの指摘を待つまでもなく，外界に対する我々の認識は我々人間種の認識能力に依存しているからである．いわば我々は色眼鏡をかけて対象に向かっているわけで，我々の認識にもたらされる対象の表象が対象自体である保証はない．けれども，対象が我々の内部にある場合，すなわち自らの自我を対象とする場合には事情は異なるのではなかろうか．我々の内部においては，認識するものと認識されるものとが同一である．そこに，我々が外部の対象を認識する場合とは違って，自我を「直接的」に認識する可能性はないだろうか．ところが，ベルクソンによれば，我々は往々にして，我々の内部に対してもやはり外部を認識する時と同じような，間接的な態度を持ち込むので，その場合には内部であっても外部同様，認識は間接的とならざるをえない，と言う．[*16]

1887～88年のクレルモン・フェラン校における哲学講義の中で，ベル

クソンは次のように述べている.「我々は知性と呼ばれるプリズムを通して，物質的なものにせよ，非物質的なものにせよ，事物を知覚している．我々は講義の中で，我々の知性は多くの事物を，それを考察することによって歪めている，ということがわかるだろう．だからただ単に，我々がこの知性の働き方を認識する時に初めて，この知性のメカニスムを研究する時に初めて，我々は，いかなる点まで，いかなる範囲内で，知性を信用することができるかを知るだろう.」[*17]

ここにはっきりと宣言されているように，実を言えば『直接与件』から『二源泉』に到るまで，一貫してベルクソンの全著作の底流をなしているのは，人間の知性の位置づけとそこからする従来の知性観に対する批判である.[*18] この講義から20年後の『創造的進化』において,「我々は，人間の知性を，行動の必要に相関的なものと見なす．……知性は生成を，自己同質的で，変化しない諸状態の連続として思い描く．……知性は常に再構成しようとし，しかもすでに与えられているもので再構成しようとする.」[*19] と言われるように，ベルクソンによれば，知性の役割は，行動の便宜のために，生成変化するものを区別し固定化してとらえることである.[*20]

時間と共に流れている変化を，人間の知性が認識しようとする場合，知性はまずその変化の主要な諸局面をそれぞれ固定する．そして後から，それら諸局面を一連のものとして並置することによって，変化を説明しようとする.『創造的進化』の中で用いられる比喩によれば，ちょうど映画のフィルムの連写が動きを再現するように，静止した局面をつなぎ合わせることによって知性は運動を説明しようとする.[*21] このような知性の働きは，我々が社会生活を営むための足場を築くには非常に有効である．だが，時間とともに生成するものを「直接的」に認識するには不向きである．ところが，我々は外界に対して空間的なものを知性を介してとらえることに慣れているために，往々にして，対象を空間化してとらえるこの知

性の癖を，内界に対しても持ち込む．そのために，空間的にではなく時間的にあるもの，たとえば我々の意識や精神といったものの本来の姿を我々は見損なっていることを，ベルクソンは指摘する．[*22]

以上のことから，ベルクソンにとって，「間接的」とは，知性を介して対象を認識する態度であり，逆に，「直接的」とは知性を介さずに対象を認識する態度である，と言えよう．つまり，「直接的」とは，自我のような持続する実在を，知性による空間化を経ずに認識する態度である．[*23]「意識生活は，直接的に見出されるか，空間を通した屈折を経て見出されるかにしたがって，二重の様相のもとに現われる．」[*24] と言われるように，我々が自我そのものをとらえるか，空間化された自我をとらえるかは，自我を認識する際の我々の態度如何による．知性による間接的な認識態度から身を引き離し，「媒介なしに」自我をとらえるなら，その時我々は，時間と共に絶えず生成変化していく自我そのものを認識できるのではあるまいか．そのようにして質的多数性としてとらえられた自我は，認識するものと認識されるものが同一であり，かつ，知性による空間化を経ていないという点で，我々の認識能力に依存する単なる「現象」ではなくなるのではあるまいか．「我々は，力強い反省の努力によって，我々につきまとう影から目を引き離して，自己自身に立ち返る時はいつでも，実在の自由な自我 (moi réel et libre) を見出す．……意識によってとらえられた自我は自由原因となり，我々は自分自身を絶対的に認識するだろう．」[*25] ここにベルクソンは，我々が時に，自我そのものという主客未分の実在の認識に到達する可能性を示唆する．そして，この実在についての直接経験を「意識に直接与えられているもの」と呼んで，彼の全哲学の礎とするのである．

さて，『直接与件』においてベルクソンは，一つの自我を形作る二つの自我について語りながら，それぞれの自我に様々な表現を当てている．実を言えば，これまで用いてきた「深層の自我」「表層の自我」という名称

も，筆者によって選ばれたそれらの中の一つの表現にすぎない．言葉に捕らわれることを避けるためであろうか，ベルクソンは意図的に同じ言葉を用いることを避けている．双方の自我の性格を明らかにするために，今それらをテキストの中から拾い出し，列挙してみることにする．

深層の自我	**moi profond**
第一の自我	premier moi[*26]
基本的自我	moi fondamental[*27]
内的自我	moi intérieur[*28]
具体的自我	moi concret[*29]
実在する自我	moi réel[*30]
生きている自我	moi vivant[*31]
表層の自我	**moi superficiel**
第二の自我	second moi[*32]
幻の自我	moi fantôme[*33]
「深層の自我」の影	ombre[*34]
「深層の自我」の外的投影	projection extérieure[*35]
「深層の自我」の空間的，社会的表象	représentation spaciale et sociale[*36]

これらの用語を一覧してはっきりわかることは，ベルクソンは，同じ資格で二つの自我があるなどと考えているのでは決してない，ということである．「深層の自我」を「実在する自我」と呼んでいることから，この方だけを実在するものと考えている．それに対して「表層の自我」は，「幻」「影」「外的投影」「空間的，社会的表象」という言葉遣いから，「実在する自我」が単に空間に投影された表象にすぎないことがわかる．「表層の自我」は，時間と共に生成変化している「深層の自我」を，知性を介して認識しようとした結果生じたものであるに違いない．「注意深い心理学は，真の持続の空間的な記号である等質的な持続のもとに，異質な諸瞬間が相

互に浸透しあっている持続を見分け，意識の諸状態の数的多数性のもとに質的多数性を見分ける．はっきりと限定された諸状態からなる自我のもとに，継起が融合と有機化を含む自我を見分ける．だが我々はたいてい前者の自我，すなわち等質的空間に投影された自我の影に甘んじている．意識は，区別せんとする飽くなき欲望に苛まれて，実在の代わりに記号を置く．あるいは，記号を通してしか実在を見出さない．」[*37] この「空間的記号」(symbole extensif)[*38] によって再構成された自我こそ「表層の自我」であろう．

自我を直接に，つまり「空間を通した屈折を経」ずにとらえるなら，自我は質的多数性として経験される．こうした自我の姿こそ，ベルクソンのいわゆる「意識に直接与えられているもの」であった．そのような諸要素が相互浸透している混沌とした自我を認識しようとして，通常我々は，その中にある要素，つまり特定の知覚，感覚，感情，観念などを抽出する．そして場合によっては，それら諸要素に言葉を当てはめる．たとえばそれに「悲しみ」という名を与えることで，その時初めて我々は「悲しみ」の感情を他者に説明し他者と共有できるようになる．本来諸要素を区別できない自我を，判明な諸要素によって再構成するという，こうした知性による一般化の操作を，我々は自我の空間化あるいは記号化と呼んで差し支えないだろう．この場合には，自我がいわば空間的に表象されて，数的多数性を示す．自我がそのような様相を呈する時は，諸動機の衝突の結果として行為が生まれるといったような，動機による行為の因果的説明が非常にうまく当てはまる，ともベルクソンは付言している．[*39]

また，「我々は，異なる秩序に属する二つの実在を認識する．一方は異質的な実在で，感覚しうる諸々の質，他方は等質的な実在で，空間にほかならない．人間の知性によって，はっきりと理解される後者の実在のおかげで，我々は，明確に区別をしたり，計算したり，抽象したり，そしておそらくは話したりすることさえできるのである．」[*40]「区別と固体化のおか

げで，我々は意識の諸状態に，不安定であるにもかかわらず安定した，相互浸透しているにもかかわらずはっきりと区別された名前を与えることができる．またやはりそのおかげで，我々は意識の諸状態を客観化し，いわば，社会生活の流れの中に入らせることができる．」[*41] と言われているように，ベルクソンにとって，自我の空間化と社会化は同じ事態を意味している．自我のうちに諸要素が見分けられ，場合によってはそれら諸要素に言葉が当てがわれた「表層の自我」を，ベルクソンはまた，社会生活に対して自己を「調整するもの」(régulateurs) とも呼んでいる．[*42] この「表層の自我」のおかげで我々は他者とコミュニケーションをはかり，社会生活を営むことが可能となる．だが，自我に含まれている独自な要素に，他者と共通の言葉を割り当てることで，自我が社会性を獲得する反面，その要素を個人のものたらしめていた個性は失われることにもなる．ベルクソンのこうした考えをさらに押し進めるなら，次のようにも言うことができるだろう．言葉はコミュニケーションの相手に受け止められ所有されると，今度は相手の個性の色合いを帯び，新しい意味を獲得するにいたるだろう．このように，言語という記号を媒介として，自我が二重の変質をこうむることにより初めて，一般に自己と他者とのコミュニケーションは成り立つ．我々の社会生活は，「表層の自我」をはさんで，「深層の自我」の記号への没個性化とその記号の他我による再個性化という操作の上に成り立っていると言ってよいのではあるまいか．[*43] こうして「表層の自我」が他者とのコミュニケーションには不可欠の足場を提供するという意味で，我々は少し先回りして，「表層の自我」を「社会的自我」と呼んでもよいのではあるまいか．

以上で，自我は，自我を認識する我々の態度如何によって，「深層の自我」として，あるいは「表層の自我」として認識されるのだとベルクソンが考えていたことが確認されたが，それでは普段実際に自我は，我々にどのように経験されているのだろうか？

ベルクソンは「持続」について語る際，しばしば pure という形容詞を付し，「純粋持続」について語る．「純粋持続」とは知性による空間化，記号化を経ずに，「直接的」に認識された実在の自我の姿だが，『直接与件』においては，「純粋持続」に立ち返ることは，まれではあるが力強い反省の努力によって可能である，とされている．[*44] しかし8年後の『物質と記憶』では，「純粋持続」は「真の経験」とは言われているものの，それは「経験の源泉」なのであって，実際には純粋な様態では我々に経験できないものとされている．この純粋に持続する自我が我々の経験へと入ってくる頃には，自我はすでに多少なりとも空間化されているわけだが，「真の経験」が「人間の経験」へと移行する「曲がり角」に身を置くことはでき，この「曲がり角」において手に入れる経験から，「経験の源泉」たる「純粋持続」を推し量ることこそ哲学者の仕事であるとされる．[*45]

しかしいずれにせよ，「我々が自我の深層から次第に遠ざかるにつれて，我々の意識の諸状態がますます数的多数性の形をとり，ますます等質的空間に展開される傾向があるのは，まさに，この意識の諸状態がますます惰性的な性質を帯び，ますます非個人的な形をとるからなのである．したがって，われわれの諸観念のうちで，我々に属するのが最も少ない観念しか言葉によっては十全に表現できないとしても，驚くにはあたらない．」[*46] という記述から明らかなように，通常我々が経験し認識するのは，「深層の自我」と「表層の自我」が様々な程度に入り混じった自我である．ベルクソンが「深層の自我」を実在するものと考えているという点さえ忘れなければ，二つの自我は我々の経験する自我を説明するための類型と見なしてもよいかもしれない．肝心なことは，自我の示す様相の，両極端からの隔たりに，「程度」を認めていることである．[*47] 我々はたいてい知性のフィルターを通して自我を認識しようとするために，そのフィルターの徹底性の度合いに応じて，我々の意識に映じる自我も，「深層の自我」と「表層の自我」，質的多数性と数的多数性が入り混じった中間の様相を呈す

るものと考えられている.

3. 「深層の自我」「表層の自我」から「個人的自我」「社会的自我」へ

これまで二つの節で，自我というものを，ベルクソンがどのようにとらえていたかということを確認した．ベルクソンは自我に二つのあり方を区別しているが，それは決して一つの自我を二分して固定的に考えているのではなかった．自我を「直接的」に認識する場合には，持続する実在の「深層の自我」が意識に与えられ，知性によって自我に諸要素を区別する場合には，実在の自我の記号的表象としての「表層の自我」が意識に与えられる．ただし，実際に意識に映じる自我は，二つの自我のいずれか一方なのではなくて，両者が程度を異にして混ざり合っているのであった.

ベルクソンが『二源泉』において，自我に「個人的自我」と「社会的自我」という二つを区別しておきながら，自我の構造については一切語らないのは，おそらくこの『直接与件』における自我のあり方が前提されているためであると思われる．したがって，『二源泉』においてもやはり，「個人的自我」と「社会的自我」ということで，自我を単純に二つの部分に分け，心の中で双方の自我が対峙しているなどと考えてはならないだろう．それでは，ベルクソンの考える「個人的自我」と「社会的自我」との関係はどうなのであろうか？　やはり『直接与件』の場合と同様に，一方の自我だけが実在で，他方の自我はその記号的表象ということにとどまるのか？

『二源泉』の中に，次のような記述がある.

> 深層で働いている我々各人の意識は，我々が下方に降りて行けば行くほど，ますます独創的で，ますます他の人格と共約できない，しかもますます言葉で表わしがたい人格を我々に示す．他方，我々自

身の表層では，我々は他者と連続しており，他者に類似しており，他者と我々との間に相互依存を作り出す規律によって他者と一つに結びつけられている.[*48]

この文章を，『直接与件』の中へ，今そっと差し入れたとしても，なんら違和感はない．誰しも「深層の自我」と「表層の自我」についての記述だと思うだろう．しかし，もう少し注意深く吟味してみる必要がある．

上の表現を筆者なりにたどってみる．——自我は，深層においては，そこに含まれるいかなる知覚，感覚，観念，感情も自我全体の個性的な色合いを帯びており，決して他者には経験することも，理解することも不可能な，その人独自なものである．それらを言葉で名指せば，まさに一般的，抽象的な言葉に置き換えるというそのことで，個性的な色合いは切り捨てられて，名指されたものは自我の「記号」にすぎないものとなってしまう．このように我々の自我のうちから取り出され，すでに言葉となってしまった知覚，感覚，観念，感情が，他者と共通で没個性的なものであるおかげで，自我の表層において我々各人は他者とコミュニケーションをすることができる．——と，ここまでは『直接与件』の内容を出ていない．

上記の引用文中の「深層」における「人格」と「我々自身の表層」とは，もはや内容の上から，それぞれ『直接与件』の「深層の自我」と「表層の自我」のことだと考えてよさそうである．この「我々自身の表層」を，続く文章で，「自分自身のこの社会化された部分」と受けている．さらにそれを次の段落では，「社会的自我」と言い換える．このことから判断して，『二源泉』における「社会的自我」は『直接与件』における「表層の自我」の延長線上にあることは疑いの余地がない．それならば，「社会的自我」との対で語られる「個人的自我」は，「表層の自我」と対をなす「深層の自我」に対応している，と考えるのが妥当だろう．したがって，『二源泉』における二つの自我，「個人的自我」と「社会的自我」のあ

り方も，基本的には『直接与件』の「深層の自我」と「表層の自我」のあり方をそのまま延長して理解してよいと思われる.[*49] つまり，実在するのは「個人的自我」の方であって，「社会的自我」は「個人的自我」の記号的表象である，また，実際に意識に映じる自我は，二つの自我のいずれか一方なのではなくて，両者が程度を異にして混ざり合っている，と一応は考えてよいだろう．ただ問題は，「個人的自我」は実在であり，「社会的自我」はその記号的表象である，と言うだけで済ませてよいものかどうか，という点である.「表層の自我」にあえて「社会的」という形容詞を冠した理由はどこにあるのか？ 「社会的自我」の真の役割は何なのだろうか？

では，『直接与件』の「表層の自我」と『二源泉』の「社会的自我」に関して，二つの著作において異なる点は何か．注目すべきは，「我々は，我々自身の表層では，……他者と我々との間に相互依存を作り出す規律によって他者と一つに結びつけられている」という，先の引用文の最後の部分である.『二源泉』のこの箇所では，我々各人は，「我々自身の表層」において，「規律」(discipline) あるいは「責務」(obligation) のおかげで他者と「連帯性」(solidarité) を保ち社会を形作っている，という面が強調されている.[*50]

第２節で示したように，『直接与件』において，「表層の自我」は，「深層の自我」の「社会的表象」とも呼ばれていた.「表層の自我」とは，「深層の自我」のうちに「潜勢態で」含まれている諸状態が判明に区別されてとらえられた自我の姿であるのだが，質的多数性としてある自我をありのままにとらえずになぜそのような自我の空間化，記号化がなされるのかといえば，それは「言語の都合と社会関係の便宜のため」[*51] であった．諸状態が相互に浸透しあって全体を形作っている「深層の自我」は，空間的に表象され，諸状態に記号としての言葉が当てがわれることで，その個性を失うが，その見返りとして，他者とのコミュニケーションに共通の足場が

築かれることになる．人々が意思の疎通を図るためには，双方の自我の間に是非ともこの共約部分がなくてはならない．したがって，自我のこの空間化は，人々が社会生活を営むための必要条件となる．それが，「表層の自我」を，実在する「深層の自我」の「社会的表象」と呼ぶ，ベルクソンの真意であった．

だが，『直接与件』においては，「表層の自我」は，確かにその社会的な役割も指摘されてはいたが，その価値についてはまだかなり消極的であった．というのも，そこではむしろ，持続する「深層の自我」の存在を提示することの方に力点が置かれていたために，「表層の自我」については主として，「深層の自我」という実在 (réalité) を覆い隠す「記号」(symbole) としての身分が強調されていたからである．ところが『二源泉』になると，個人と社会との関係こそが問題の中心に据えられたために，個人と社会との接点をなす「表層の自我」の積極的な役割が問われ，そこに新たに，規律ないしは責務（以下，「規律」とのみ表記）という観点が導入された．

さて，次の文章が，『直接与件』の「表層の自我」から『二源泉』の「社会的自我」への橋渡しをしていると思われる．

> 我々自身の表層によって，我々は他者と連続しており，他者に類似しており，他者と我々との間に相互依存を作り出す規律によって他者に結びつけられている．……我々の自我が結びつく場所を見出すのは，通常は，我々の自我の表層において，すなわち，外化された他の諸人格によって織りなされている目の詰んだ織物の中へと我々の自我が挿入される点においてである．つまり，我々の自我の堅固さは，この連帯性にある．だが，我々の自我が結びつく点において，我々の自我自体は社会化されている．[*52]

この記述において，「表層の自我」こそが，我々の自我を社会（他者）に結びつける役割を果たしていることが繰り返されているが，この文章を境に，「表層の自我」は「社会的自我」へと名前を変える．「我々の自我の表層」は「社会化」され，「外化された他の諸人格によって織りなされている目の詰んだ織物の中へと我々の自我が挿入される」と語られているが，こうして提示された，我々の自我と社会との結びつきに関して，実際上はともかく，今便宜的に次の二つの局面を区別しようと思う．一つの局面は，個々人の自我内部における「社会的自我」と「個人的自我」との関係であり，もう一つの局面は，個々人の自我と社会との関係である．[*53] 個人と社会の結びつきをまずこの二つの局面に分けて検討し，それぞれの局面において「社会的自我」が果たしている役割の特徴を指摘したい．その後でこれら二つの局面を総合し，ベルクソンの考える「社会的自我」の役割を全体として考察することにする．個人と社会との結びつきにおける「個人的自我」と「社会的自我」の関係，とりわけそこにおいて「社会的自我」が果たしている役割を明らかにすることによって，ベルクソン哲学における個人と社会との関係の独自性も自ずと姿を現してくるに違いない．

(1) 「個人的自我」と「社会的自我」との関係

① 社会の規律は「社会的自我」として自我のうちに内在し，「個人的自我」を自我内部から規制していること．

「個人のために，日常生活の大まかなプログラムを描くのは，社会なのである．我々は，諸々の規則や責務に従うことなしには，家庭生活を営むことも，職業に従事することも，日常生活の様々な配慮をすることも，買い物をすることも，通りを散歩することも，家で過ごすことさえもできない．」[*54] と『二源泉』で語られている．だが，実はすでに，『直接与件』の中で「表層の自我」についてこう言われている．「たいていの場合，外部

からくる印象は，池の水に落ちる石のように私の意識全体を揺り動かすわけではなくて，意識の表面にいわば固定化された観念，たとえば起きていつもの仕事に従事しようというような観念を動かすにとどまる．……この場合，私は意識をもつ自動人形であるのだが，その方が私にとってはまったく都合がよいからである．我々の日常の大部分の行動がこのようにして行なわれるということ，また，我々の記憶の中にある種の感覚，感情，観念が固定化されているおかげで，外部の印象が我々のうちに，意識的であり知的でさえありながら，多くの面で反射行為に似た運動を引き起こすのだということがわかるだろう．」[*55] 我々は，外部からくる印象を，常に「心の全体で」(ξὺν ὅλῃ τῇ ψυχῇ) 受け取っているわけではない．もしこの「表層の自我」がなかったならば，われわれはなにをするにもそのつど全身全霊をもって取り組まなければならないだろう．だが実際は，ある程度頻繁に繰り返される印象に対しては，いつでも即座にその社会にふさわしい行動が取れるよう，「表層の自我」のうちにあらかじめいくつかの行動パターンが準備されている．それらの行動パターンは，我々が暮らしている社会の規律にかなったもので，外部からの印象に応じて半ば自動的に作動する．というのも，大部分は決まりきったことの繰り返しである日常生活を送るには，そのほうがはるかに好都合だからである．このような「表層の自我」の役割は，そのまま「個人的自我」に対する「社会的自我」の大きな役割を成している，と言ってよいだろう．

こうして我々に社会生活を可能にしているものは，我々の意識の表層に凝固している社会の規律である．しかし，社会の規律というと，通常我々は，外部にある社会から個人に威圧的に課せられるもののように考えがちである．だがベルクソンはむしろ，社会の規律は我々自身の自我のうちに内在していると考え，その自我のうちに内在化された社会の規律を「社会的自我」と呼んでいる．だとすれば教育の役割とは，各人を社会の規律に従わせることというよりはむしろ，各人の自我のうちに社会の規律を植え

つけ，その社会に適合した「社会的自我」を作り上げることだということになる.[*56]「社会的自我」が自我のうちにうまく形成されさえすれば，あとは自ずと個人を社会に結びつけるべく「社会的自我」は機能するだろう．社会の規律はこのように「社会的自我」として自我に内在して「個人的自我」に社会生活を送らせている．ここから，「我々が責務を負っているのは，理論上は他の人々に対してだけであるとしても，事実上は自分自身に対してであろう」[*57] という表現が出てくるのである．だが「社会的自我」によって「個人的自我」が規制されている時，我々はいわば「自動人形」なので，この「表層の自我」の働きを，普段我々はほとんど意識しない．いかにこの「個人的自我」と「社会的自我」との結びつきが強いかということを我々が思い知るのは，「個人的自我」が「社会的自我」の規律にそむいた時だとベルクソンは言う.[*58]

② 一般に，道徳的苦悩，良心の呵責は「社会的自我」（その社会に固有の価値判断）に由来するということ.

もし我々の行動を規制しているものが，自我のうちに内在化された社会の規律だとすれば，ここからさらにもう一つの興味深い帰結が生じる．ベルクソンも「良心の下す審判とは，一般に，社会的自我の下す審判である.」あるいは，「道徳的苦悩とは，一般に，社会的自我と個人的自我との関係の乱れである.」[*59] と言っているように，一般に我々の道徳的良心，あるいは良心の呵責なるものは，絶対的な正義の法廷ではなく，我々が暮らしている社会に固有な価値観からする相対的な価値判断に過ぎない，ということになるだろう.[*60] ベルクソンは，大罪人が自首するに到るまでの心理を分析して，彼の苦悩は，神に対して罪を犯したことに由来するものではなく，その社会の規律を破ったがためにその社会から切り離されて孤独に陥ったゆえのものと解釈している.[*61]

(2) 個々人の自我と社会との関係

① 「社会的自我」のおかげで，各人の自我は社会（他者）に結びついているということ.

我々は，自我の社会化されている表層部分によって社会の中に組み込まれ，その社会に暮らす他の人々につなぎ止められている.[*62]「社会的自我」とはこのように，個性的な「個人的自我」を一般化するもので，他者とのコミュニケーションを成立させるには不可欠のものであるということは，既に再三指摘された通りである．したがって「社会的自我」は，いわば社会を構成している人々を互いにつなぐ公約数，共通項を成しているわけである.

② 社会の規律を形作り維持しているのは諸個人の「社会的自我」にほかならないということ.

先の引用文の「外化された」「人格」とは「社会的自我」にほかならず，その「外化された」「諸人格によって織りなされている目の詰んだ織物」とはすなわち「他者と我々との間に相互依存を作り出す規律」である，と言われている．つまり，社会のメンバー達の「社会的自我」が結束して目の詰んだ織物を成しており，各メンバーは自らその一つの織り目となることで社会の連帯性へと組み込まれることになる．この織物こそ，社会の規律や言語を含めた習慣の体系，すなわち社会の（公共の）秩序であろう．ということは，我々は通常，社会の規律に拘束されている，と受動的に考えがちだが，実は，社会の規律を承認し作り上げているのは，他でもない，我々自身なのだという能動的な面をも忘れてはならないだろう.

さて，以上(1)(2)の局面から明らかなように，「社会的自我」は，個人の内部にあると同時に外部において社会の秩序を形作ることに貢献している．つまり「社会的自我」は，各人の自我内部において「個人的自我」を社会の規律によって規制する一方で，対外的には，それ自身，社会の規律

という織物を織りあげる一つの織り目を成している．したがって，もしこの「社会的自我」がなかったとしたら，「個人的自我」は，糸の切れた凧のように，ばらばらで不安定なものだろう．ところが，各人は，「個人的自我」の独自性を少々犠牲にしながらも，自らの自我のうちに「社会的自我」を形作ることにより，その「社会的自我」を介して，社会の他のメンバー達との結びつきを保証される．そればかりでなく，「個人的自我が社会的自我を生き生きと現存させているならば，我々は，たとえ孤立していても，社会全体の励ましや支持さえ受けてするに等しいだろう．」[*63] と言われるように，「社会的自我」が社会秩序の一構成要素を成していることで，各人の「個人的自我」は社会のうちに組み込まれ，生活の安定を得ることになる．他方，社会秩序は実質的には社会のメンバー達の「社会的自我」が作り出していることになるから，現在の社会秩序が個々人の外部に絶対不変のものとしてあるわけではなく，社会秩序の変革ということも，おそらくあり得ないことではなかろう．だが，社会の規律が多くのメンバー達の支持を得ている場合には，それを少数の個人が変更することは容易ではなかろう．ベルクソンが次のように語っているのはまさにこの事情である．「社会に所属している個人もまた，有機体を構成する細胞がとらえられている必然性と類似した必然性にとらえられている．個人はこの必然性を作り出すのに少しばかり貢献したし，何よりそれを甘受している．だが個人はこの必然性を撓めること，そればかりか断ち切ることさえできるのである．それでもやはり，免れることができるという意識を伴いつつ抱くこの必然性の観念こそ，個人が責務と呼んでいるものなのである．」[*64]

社会は「社会的自我」に託して個人を規制すると同時に個人に支えを提供し，他方，個人は「社会的自我」を通じて社会の規律を遵守することで社会の秩序を作り上げ維持している，と言ってよいだろう．そのような共存関係が，個人と社会との間には認められる．こうして「社会的自我」は，『直接与件』の「表層の自我」のような，ただ単に「実在する自我」

の一つのとらえ方，すなわち「実在する自我」を記号化することによって個人に社会生活を可能にする「社会的表象」にとどまるものでないことは明らかである．『二源泉』において「社会的自我」には，社会の規律によって個人を拘束すると同時に個人をして社会秩序の構成に参加せしめるという，新たな役割が付加されたわけである．

ただし，ここで語られている社会とは，ベルクソンのいわゆる「閉じた社会」であることを断っておかねばなるまい．もちろん人間社会は，全人類を包含する「開いた社会」となる可能性を持つものである．だがベルクソンによれば，原始社会のみならず，我々の文明社会もまた「閉じた社会」であり，その本質は，「ある数の個人を含み，それ以外の個人を排除することにある．」[*65] そのような社会は，習慣の力を借りて個々人にその社会の規律を課すことによって，社会及びそこに含まれる個人の自己防衛，自己保存を目指している．そうした観点から，ベルクソンは人間社会を昆虫社会に，あるいは人間社会と個人のあり方を，有機体 (organisation) とそれを構成する個々の細胞に比している．「閉じた社会」においては，社会と個人にこのような相互関係がある以上，社会が個人なしに存立し得ないばかりでなく，個人もまた社会を離れては生きられないはずである．昆虫が本能により種に従属し，盲目的に社会の規律に従うことで自分自身と社会の双方に貢献するように，人間もまた，知性により社会の規律に従うことで，自分自身と社会の双方が利益にあずかっているという，ベルクソンの考える「閉じた社会」と個人のあり方が，以上の考察の帰結としてはっきりと浮き彫りになるだろう．この「閉じた社会」と個人の間にある共存関係において，「社会的自我」は社会と個人双方をつなぐ要(かなめ)とも言うべき役割を果たしていることが理解されるだろう．

おわりに

ベルクソンは晩年，神学者セルティランジュに，「私は生涯を自我の研

究に費やしてきました.」*66 と述懐していることからも察せられるように，彼の哲学は，自我をすべての哲学的考察の出発点として，それを精神や生命や社会の問題にまで敷衍したという点で，その全体が自我論だと言えなくもない．そしてそれらに共通して言えることは，自我の本質は時間とともに持続している，という点である．しかしそれはあくまで持続する実在の本質的なあり方なのであって，現実にはそれらが純粋な仕方で我々に把握されているとはベルクソンは考えていない．自我にせよ，精神にせよ，生命にせよ，社会にせよ，純粋に持続するものとして極限で考えられた場合には，それらは時間とともに絶えず新たなものが創造されていくプロセスであるが，現実には，程度は様々ではあるがそれらは空間化されている．ベルクソンの用語法では，この時間とともに持続する一方の極限的様態と，他方，空間化されたものの極限的様態にそれぞれ対立する用語が与えられ，実際に我々の受け取る現実は二つの極限的様態の混合したものであるとして，両者の対立を軸に語られる，というスタイルで常に論述が進められる．

これまで我々は，ベルクソンが，自我について語るのに，『二源泉』で用いた対立する言葉，「個人的自我」と「社会的自我」を手掛かりとして，彼の自我理解を確認しようとしてきた．その際，『二源泉』の出版から遡ること 42 年，最初の著書『直接与件』の中でやはり自我について用いられている二つの対立する言葉，「深層の自我」と「表層の自我」を導きの糸として論を進めていった．その結果，それぞれ「個人的自我」は「深層の自我」の，「社会的自我」は「表層の自我」の延長線上にあることが確かめられ，しかも「社会的自我」は社会との関係でさらなる進展を遂げていることがわかった．

ベルクソンのとらえる自我は，生きて動くものの如く，「個人的自我」と「社会的自我」の間を絶えず変化する．決して一定の「社会的自我」が「個人的自我」を絶えず監視している，といったものではない．意識の態

度により自我は様々な程度に空間化され，「社会的自我」に近づく．しかし，「社会的自我」は真の自我を隠す偽りの，まやかしの自我かというと，そんな風にはベルクソンは考えていない．むしろ，個性的な我々は，「社会的自我」による一般化のおかげで相互にコミュニケーションが可能となり，社会の秩序にはめ込まれ，社会生活の安定を得る．我々も生物である以上，昆虫同様，社会なしには，「社会的自我」なしには生きられない．しかし，社会の秩序を作り上げているのは，他ならぬ，我々社会を構成する各人の「社会的自我」であった．このように，「社会的自我」の役割は，「個人的自我」を社会につなぎ止めることで我々自身の生活を維持し，同時に社会の秩序を作り上げることで社会を維持していくという，個人と社会双方が存続してゆくための要(かなめ)をなすものであった．

さてしかし，ベルクソンの自我論はこれに止まるものではない．実を言えば，我々がこれまで論じてきた自我は，「閉じた社会」との関連における「閉じた魂」の側面にほかならない．ベルクソンは『二源泉』において，これと対比的に「開いた魂」について語っていることは周知の通りである．そしてむしろそちらの方が創造的な本質を具えており，ベルクソン哲学においては重きをなしていると言ってよいだろう．「開いた魂」が「開いた社会」を創造してゆくという文脈においては，社会と個人の関係も，本論考において分析されたものとは著しく異なっているだろう．だが我々はこれまでこの「開いた魂」「開いた社会」に触れることは注意深く避けてきた．それはまた優に別の論文の主題をなすに足るものだからである．自我と「開いた社会」との関係については，機会を改めて論じたい．

註

以下に挙げるベルクソンの原著からの引用ページ数は，
《Œuvres》(Édition du centenaire, Paris: P. U. F., 1959)
による．ただし，後の括弧内に単行本（いずれも Collection《Quadrige》）

《Essai sur les données immédiates de la conscience》(P. U. F., 1927, 略号 DC)

《Matière et mémoire》(P. U. F., 1939, 略号 MM)

《L'évolution créatrice》(P. U. F., 1941, 略号 EC)

《Les deux sources de la morale et de la religion》(P. U. F., 1932, 略号 MR)

のページ数を付した.

*1 Œuvres, p. 986 (MR, p. 8).

*2 Ibid. p. 83 (DC, p. 93).

*3 Ibid. p. 83, 91(DC, p. 93, 103).

*4 Ibid. p. 91 (DC, p. 103).

*5 Ibid. pp. 80–81 (DC, p. 90).
「質的多数性」と「数的多数性」の対立には，時間と空間，運動とその可能な停止点という，ベルクソン哲学全体の根幹をなす対立が見られる．ところで，「多数性」とは数的なもの，空間的なものに関する言葉遣いなので，「質的多数性」という言葉が形容矛盾であることは，ベルクソンも断っている．(Ibid. p. 81 (DC, p. 91)

*6 Ibid. p. 81 (DC, p. 90).

*7 Ibid. p. 81 (DC, p. 91).

*8 Ibid. p. 72 (DC, p. 80).

*9 Ibid. p. 71, 72 (DC, p. 79, 80).

*10 Ibid. p. 91 (DC, p. 102).

*11 Ibid. p.109 (DC, p.124).

*12 Ibid. p. 83, 154 (DC, p. 93, 177).

*13 Ibid. p. 85 (DC, p. 95).
ベルクソンが意識の持続に関して述べた，「異質的諸瞬間」(不連続) の連続というパラドックスは，最近では例えば，Jean-Luis Vieillard-Baron, Les paradoxes du moi dans l'Essai de Bergson, dans: Bergson Naissance d'une philosophie, P. U. F., 1990, pp. 57–69. において指摘されている．

*14 Ibid. p. 108 (DC, p. 123).

*15 André Lalande (éd.), Vocabulaire téchnique et critique de la philosophie, vol. 1 (Collection《Quadrige》), Paris: P. U. F., 1926, pp. 473–477.

*16 Œuvres, pp. 145–146 (DC, p. 167).

*17 Henri Bergson, Cours, vol. II, Paris: P. U. F., 1992, p. 33.

*18 ベルクソンが従来の知性観を批判するからといって，しばしば誤解されてき

たように，ベルクソン哲学が反知性主義だということではない．ベルクソンはただ，人間の知性にその本来の機能を返すことで，ア・プリオリな認識形式としての知性の桎梏から逃れ，実在そのものの認識にいたる可能性が開けるのではあるまいか，と考えているのである．

*19 Œuvres, p. 624, 633 (EC, p. 153, 164).

*20 Ibid. pp. 150–151 (DC, p. 173).

*21 Ibid. pp. 752–753 (EC, pp. 304–305).

*22 Ibid. p. 85 (DC, pp. 95–96).

*23 『創造的進化』においてベルクソンは，対象を空間化して認識する能力を「知性」，持続する実在を生成するままに直接認識する能力を「直観」と呼ぶことになる．

*24 Ibid. p. 91 (DC, p. 102).

*25 Ibid. p. 152, 153 (DC, p. 175, 177).

*26 Ibid. p. 91 (DC, p. 103).

*27 Ibid. p. 85 (DC, p. 96).

*28 Ibid. p. 83 (DC, p. 93).

*29 Ibid. p. 92 (DC, p. 104).

*30 Ibid. p. 92, 152 (DC, p. 104, 175).

*31 Ibid. p. 92, 154 (DC, p. 104, 177).

*32 Ibid. p. 91 (DC, p. 103).

*33 Ibid. p. 109 (DC, p. 124).

*34 Ibid. p. 85, 109 (DC, p. 95, 124).

*35 Ibid. p. 151 (DC, p. 173).

*36 Ibid. p. 151 (DC, p. 173).

*37 Ibid. p. 85 (DC, pp. 95–96).

*38 Ibid. p. 85 (DC, p. 95).

*39 Ibid. p. 90, 111 (DC, p. 101, pp. 126–127).

*40 Ibid. p. 66 (DC, p. 73).

*41 Ibid. pp. 150–151 (DC, p. 173).

*42 Ibid. p. 84 (DC, p. 94).

*43 Ibid. p. 89 (DC, pp. 100–101).

無論ベルクソンは，人間同士のコミュニケーションのすべてがこの表層の次元で成り立つと考えているのではない．『創造的進化』においては，生命的な対象を，「直観」により「共感」する可能性が示唆されている．なおここで用いた「没個性化」「再個性化」という言葉はベルクソンの用語ではなく，

筆者の表現である.

*44 Ibid. p. 151–152 (DC, pp. 173–175).

*45 Ibid. pp. 320–321 (MM, pp. 204–205)
ベルクソンは,「純粋」という形容詞を,先験的なものに付するのではない.あくまでそれらは経験のこちら側にある.ただ,実際の経験のいわば原料をなすものとしてあるのであって,『物質と記憶』によれば,それらを純粋な状態で経験することはできない,とされる.

*46 Ibid. p. 90 (DC, p. 101).

*47 Ibid. p. 109 (DC, p. 125).

*48 Ibid. p. 986 (MR, p. 7).

*49 この双方の自我の対応関係から判断するに,「個人的自我」は決して単なる「反社会的自我」ではない,と筆者は考える.

*50 Ibid. p. 986 (MR, pp. 7–8).

*51 Ibid. p. 111 (DC, p. 126).

*52 Ibid. p. 986 (MR, pp. 7–8).

*53 『二源泉』の中で,「個人の中の社会」「社会の中の個人」と小見出しが分けられていることから,ベルクソンもまたこの二つの局面を区別して叙述していると解釈することもできる.

*54 Ibid. p. 990 (MR, p. 12).

*55 Ibid. p. 111 (DC, pp. 126–127).

*56 Ibid. pp. 986–987, 991 (MR, pp. 8, 13–14).

*57 Ibid. p. 986 (MR, p. 8).

*58 Ibid. p. 989 (MR, p. 11).

*59 Ibid. p. 988 (MR, p. 10).

*60 ここで,ベルクソンが注意深く,「一般に」と繰り返しているのは,「開いた道徳」の余地を残しておくためだと思われる.

*61 おそらくベルクソンの分析には,ドストエフスキーの小説『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフが念頭にあると思われるが,我々は,ラスコーリニコフが最後まで自分の老婆殺しそのものについては後悔していなかったことを想起せねばならない.

*62 Ibid. p. 987 (MR, p. 8).

*63 Ibid. p. 987 (MR, p. 9).

*64 Ibid. pp. 985–986 (MR, p. 7).

*65 Ibid. p. 1000 (MR, p. 25).

*66 Antoine D. Sertillanges, Avec Henri Bergson, Paris: Gallimard, 1941, p. 37.